論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　三上　由香

論　文　題　目

目標設定を取り入れた多読活動における英語学習者の動機づけモデルの構築
(Formulating a Model of EFL Learners' Motivation in Goal-Setting Integrated Extensive Reading)

論文審査担当者

主　査　名古屋大学　教授　木下　徹

委員　名古屋大学　教授　山下淳子

委員　名古屋大学　教授　衣川隆生
（国際言語センター）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

I.　論文の構成と概要

本研究は、大学の教養課程の日本人英語学習者を対象に、理論的枠組みとして、主として動機づけに関する目標設定理論、及び、関連するものとして、自己効力感に関する理論や自己決定理論等を援用しながら、目標設定を取り入れた授業内での多読活動において、量的研究方法を中心に、質的研究方法も補足的に用いることで、設定された目標と動機づけの関係を明らかにすることを目的としている。具体的には、(1) 設定目標に含まれる 3 要素（目標の具体性、難易度、目標に対するコミットメント）に、内発的動機づけと自己効力感を加えた、5 つの主な要因間の関係モデルを構築することを第一義的研究課題とし、関連して、(2)前述の 5 つの各要素の高低におけるパターンの探求、(3)多読活動における学習者の目標設定の実態の解明、(4)多読活動における学習者目標の活用のされ方と目標設定が学習者の動機付けに影響を与えるプロセスの解明、(5)質的データと量的データの総合によるモデルの展開等を研究課題として設定し、それらを個人差の観点も踏まえて探求している。

本研究は、第 1 章の「序論」から、第 6 章の「総括」までの 6 つの章と、引用文献リスト、及び、6 種類の巻末資料により構成されている。まず、序論では動機づけ研究の歴史、動機づけと目標設定の関係について研究背景を導入した後、本研究の目的と本論文全体の構成について、記述している。序論に続く第 2 章では、関連する先行研究を、目標設定理論、動機づけの諸要因、第 2 言語における多読、多読における動機づけという、主として 4 つの観点から概観し、併せて、既存の研究の問題点も指摘している。その上で、上述した本研究の課題を解説している。第 3 章は、調査 1 として、目標設定、内発的動機づけ、自己効力感の関係について、使用した量的な研究方法論の紹介から、結果に至るまでを記述している。実験参加者は、経営学・経済学専攻の大学生計 130 名で、データ収集は 2012 年 4 月から 2014 年 7 月にかけてであり、春期秋期各計 12 回、毎週 90 分中 20 分が多読活動にあてられた。結果として、研究課題(1)については、主として共分散構造解析を用いて、主要な 5 つの因子間の関係を、目標の具体性、難度、コミットメントを、説明因子とし、内発的動機づけと自己効力感を目的因子とする最終モデルを図 3-4 として提示している。この点に関する本研究の知見の 1 つとして、特に、目標の具体性と目標への取り組みの熱意の間に比較的強い正の相関がみられたこと、取り組みの熱意は、内発的動機づけと自己効力感に直接的影響を与えること等を報告している。一方、目標の難易度は、内発的動機づけには直接影響するが、自己効力感には直接的影響は見られず、この点では個人差の観点からの考察が必要であると指摘している。また、研究課題(2)については、クラスター分析により、実験参加者が類似する特徴を有する 4 つの群に分けられること、そのうち 3 つの群については、目標の因子に属する観測変数群と動機づけの因子のそれらの間には総じて正の相関の傾向が見られるのに対し、第 4 群では、極端に高い目標の設置の結果、自己効力感が低下したと報告している。次の第 4 章は、調査 2 として、目標設定の活用と、その効果に関して、質的研究手法を用いて検討している。対象クラスと調査時期(2014 年 4~7 月と 10~12 月、計 22 回の授業内多読活動時)、多読活動の内容、参加者、データ収集の手続き、および、得られた知見の一般化を目指したトライアンギュレーションについて論述した後、研究課題(3)に関して、参加者の設定した目標を整理した結果、「挑戦的目標」から「高すぎる目標」までの 5 つの範疇を提示している。また、研究課題(4)についてのデータ分析の結果、目標設定の活用に関しては、「(目標達成を目指す自己の）ペースメーカー」、「(自らの学習行動を内省するための）振り返りのきっかけ」等 5 個を、目標設定の効果としては、「意欲の向上」、「成長の認識」等 4 個を、さらに、目標設定の負の影響としては「(未達時の）不快感」、「達成後の意欲低下」の 2 個を、それぞれ、抽出している。第 5 章は先行する 2 章をまとめて、目標設定の持つ動機づけに対する影響について、量的研究と質的研究の結果を総合的に考察している。その考察の一部として、量的分析から推定された目標の設定から動機付けへの肯定的な影響に加えて、それが、さらなる新しい目標への好循環を生む場合と、逆に自己効力感の低下に繋がる場合

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

の、両方の可能性が示唆されている。さらに、その違いは、主として学習者の自己調整スキルのレベルによることも推測されている。最後に、第６章では、研究全体を総括し、本研究による知見の要約の他、教育的示唆として、効果的な目標設定の特徴と自己効力感の重要性を挙げ、最後に残された課題に言及している。

II. 評価

積極的に評価すべき点として以下の諸点を挙げることができる。

(1)大学の授業という制約の多い実践の中で、教育実践に根ざした形で、モデル構築に必要な資料を収集し、結果を示したこと、さらに、その結果が教育実践にフィードバック可能なものであり、教育の質の向上に寄与するものであることは、高く評価できる。

(2) 目標の具体性、難度、取り組み（コミットメント）という、目標に関する三つの因子間､およびそれらが内発的動機づけと自己効力感という動機に関わる二つの因子にどのような影響を与えるかを量的な手法と質的な手法を組み合わせて示したこと、及び、多用なデータを総合的に用いてモデル図を精緻化したことも研究手法のあり方を考える上で当該の研究フィールドに寄与するものであると考えられる。

(3) (2)と一部重複するが、共分散構造解析とクラスター分析を併用し、さらに、特徴的な個人を抜き出してのインタビューデータによる分析を加えることで､実験参加者の全体像、全体の中で相対的独自性を有する各集団における傾向、さらに、その中における個人差といった調査対象の持つ重層的性質を捉えることに成功している。

但し、本論文は、次の様な、なお、改善の余地のある点も含んでいる。

(1) 目標設定理論を応用しての研究であるが、教育的な知見を得るだけでなく、この研究の結果が理論に対してどのような知見をもたらしたのかについても考察があることが望ましい。

(2) 多読には効果があるという前提に立っているが､多読の効果も時間軸や様々な学習者要因によりその現れ方が違う可能性がある。目標設定をしてたくさん読ませた結果、どのように英語力に変化が現れるのかという点も将来追及するべきである。

(3) 自己調整能力と目標設定成功が関係する可能性を見出したことは評価できるが､自己調整能力の本質は何か､また英語教育で自己制御能力を伸ばすにはどうすればいいのか等､より理論的、応用的問題も今後考えるべきである。

(4)多読10原則をもう少し検証して、その修正、加筆の必要があるかどうかに関しての検証があればよかったと考えられる。特に、28ページに書かれている、「一般に多読はできるだけたくさん読むことが求められる...目標としては曖昧であるととらえられ、動機付けを高めるのには十分ではない」という先行研究の概観から導き出された課題が、ほぼそのままの形で92ページの議論の部分でも示されていることがある。もちろん、その後、目標設定の方法についても議論されているが、それは「できるだけたくさん読む」から「具体的で､挑戦的ではあるが達成できる目標」という表現に言い換えられているだけである。質的な研究手法は、必ずしも理論の一般化を目指すものではなく、文脈などが限定された

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

今回と同様の実践場面での具体的な指針を目指すものであるとすれば、筆者がこれまで行ってきた実践フィールドにおいてはさらに踏み込んでどうすればいいか、という限定的な示唆があってもよかったのではないかと思われる。
(5) 54ページで説明されている「事前に設定した質問項目」からは「目標設定の方法」と「動機に対する効果」は抽出できると予測可能だが、「目標の活用」についてどう資料を収集し、そこから概念を抽出するかが読み取りにくい。
(6) トライアンギュレーションは、一つの事例に関して複数の視点・資料から資料を収集し、その結果から、資料、および解釈の妥当性、信頼性を高める方法である。インタビュー時に利用していた自己評価シートはインタビューの結果にも影響を与えていると予測できる。従って、今回の方法からデータ収集方法の妥当性を説明するためにトライアンギュレーションという用語を使用するのは厳密な意味では違和感がある。
(7) p. 78で示されているモデルでは、始点の目標から取り組みへ矢印が一本だけ出ている。ただ、結果を読む限り、どのような目標を立てるかで、取り組みは変わると解釈できる。従って、目標からは複数の取り組みが仮定でき、取り組みの結果も、目標達成、未達成の二分化ではなく、進歩の感覚なども取り組みの結果となるのではないかと思われる。さらに、第５章、６章の記述にあるように、モデルは循環的なものになると考えられる。この点も、モデルとしても明示的に示した方がより望ましい。

以上のような改善すべき点はあるが、それらは、本論文の価値を著しく損ねるわけではない。また、その一部は筆者も本研究の限界および今後の課題として、ある程度言及している。従って、筆者自身による改善も充分期待できる。

総合的に判断して、本研究は博士の学位を認定するべき要件を十分備えていると思われる。